第四講　「様々な設問」を解く

次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。

個人の自由を至上の価値として見出したことが、近代社会のひとつのメルクマールであろう。ミシェル・フーコーによれば、西洋における自由の概念には、二つの源泉がある。ひとつは、人権思想に基づく自由、法理念としての自由である。すべての個人は、本来的に自らの手元にある種の自由を保持しており、その一部はゆずり渡すことも可能だと考えられている。もうひとつは、統治から離れることによって自由が生まれるという発想である。こちらの自由は、法権利の行使として概念化されるのではなく、単純に、統治者からの被統治者の独立として知覚される。前者は、アイザイア・バーリンが「積極的自由」と呼んだ類型に対応しており、主として、啓蒙（けいもう）主義の中で主張された。後者は、消極的自由であり、経済学へとつながっていく自由である。どちらの観点においても、近代の初期は、自由への闘い、自由を獲得するための闘いによって特徴づけることができる。

だが、今日、われわれは十分に自由な社会を生きている。二〇世紀末期

以降の現代社会は、許容度の非常に高い社会、ある意味で寛容な、したがって自由な社会である。このことは、今日では、「人権」（自由の第一の類型）の内実が、まさに禁止の中の禁止（自由の第二の類型にとっての最後の障害物）とも見なすべき、モーセの十戒を蹂躙（じゅうりん）する権利にまでなっているという事実のうちに、顕著に現れている。たとえば、プライヴァシーの権利は、ある意味で、姦淫（かんいん）の権利である。幸福を追求する権利や私的所有権は、盗みの権利である。報道の自由や表現の自由は、嘘（うそ）をつく権利であると言えなくもない。そして、信仰の自由は、それこそ、端的に[1]グウゾウ崇拝の権利、偽の神を崇（あが）める権利以外のなにものでもない。

　現在の人権が十戒を蹂躙する権利になっているという、ウィットのきいた解釈は、スラヴォイ・ジジェクによるもので、もちろん、これはいささか言い過ぎではあるが、真実の一面をついている。いずれにせよ、人権には、法や権力がタッチすることができないグレイゾーンがあり、このグレイゾーンを利用すれば、人は容易に、「十戒」等の伝統的な［　ア　］に違反することができる。[X]これほどまでに、われわれの社会は許容的である。

　ということは、われわれは、啓蒙主義の時代に、西洋の人民と知識人が夢見た自由な社会をすでに獲得している、ということになるのだろうか。

しかし、何かがおかしい。何かがちがう。

＊　＊　＊

ミヒャエル・エンデの短編に、「自由の牢獄（ろうごく）」と題した短い寓話（ぐうわ）がある。この寓話は、民から「インシアッラー」と呼ばれている盲目の男が、教主（カリーファ）（イスラム国家の最高権威者）に話して聞かせた経験談の形を取っている。

この男によれば、彼は若い頃、はぶりのよい商人だった。そして自らの成功は、自身の能力と[2]ケンメイさのせいだと信じ、うぬぼれていた。そのため彼は冒瀆的（ぼうとく）になり、神（アッラー）が預言者を通じて［　イ　］した法をないがしろにするまでになっていた。たとえば彼は、断食の月すらも無視して、飲み食いして過ごした。

その彼の前にあるとき美しい女が現れ、彼を[3]ユウワクした。この女は、彼女を求める彼にこう言う。「私を好きなようになさいませ。でもその前にお誓いください。あなたさまが今日もこれからも従われるのは、あなたさまの意志であることを」と。彼女の要請に応えて、彼は彼自身の眼（まなこ）にかけてこのことを誓った。そして、いよいよ彼はこの不思議な美女を抱こうとするのだが、その瞬間、彼の身体は宙に浮き、星の世界の闇の中へと飛び出してしまう。実は、女は、魔王イブリースだったのだ。気がついた

ときには彼は、巨大な円形の丸天井に[4]オオわれた建物の真ん中にいた。

この建物の円形の壁には、無数の閉じられた扉がある。彼は、ここからすぐに逃げだそうとしたが、どうしても逃げだすことができない。扉はありあまるほどあるのだから、脱出口はある。が彼の逃亡を妨げたのは、まさにこの脱出口なのだ。扉が多すぎるのである。どの扉から出ていくべきか、彼はその理由を見出すことができない。一見したところ、どの扉も同じに見える。だが、ある扉の向こうにはライオンが待ち構えているかもしれない。また別のある扉は財宝への道に通じているかもしれない。しかし、これらのことをあらかじめ知ることはできない。結局、彼はどの扉を開けるかを決定することができず、そもそも扉に鍵がかかっているのかどうかすらも確認することができない。

やがて彼はあきらめ、扉への関心もうすれていった。要するに、[Y]あれほど脱出することを渇望していた彼が、やがて何も欲しくなくなったのである。

ここで右の寓話から引き出しておきたい教訓は、通常は解放を意味する「自由」が、まさに束縛と感じられることもある、ということである。完全な解放と完全な束縛が同じものになってしまうという［　ウ　］が、この寓話の教訓である。

＊　＊　＊

だが、なぜ自由なのに不自由なのか。なぜ、十分に自由があるとき、不自由を感じてしまうのか。Z自由が不自由へと反転するのは、どのような機制によるのか。問題提起のために、もう一度ジジェクのエッセイからジョークを借りてこよう。このジョークは、旧東ドイツで語られていたものだという。ひとりの労働者が、シベリアで働くことになった。彼は、シベリアから出す自分の手紙が、当局によって［　エ　］なされるだろう、ということを知っていたので、シベリアへと発つ前に、親友にこう言ったという。「俺たちの間で、秘密のコードを作っておこう。手紙が、普通の青いインクで書かれていれば、その内容は真実だが、もし赤いインクで書かれていれば、そこにあることは虚偽だ」。その一カ月後に、シベリアにいる男から親友に手紙が来た。文章は［　A　］いインクで書かれていた。次のように。

　ここでは、すべてがすばらしい。店に品物がいっぱいあるし、食料もいっぱいだ。アパートは広くて、暖房も快適。西側からの映画も見られる映画館がある。きれいな女の子もたくさんいる。ここで不自由なこと、使えないものはただ一つ、［　B　］いインクだけだ。

もちろん、このジョークの趣旨は、シベリアには自由がない、というこ

とにある。ほんとうは、シベリアでは、店に品物がほとんどなく、欲しいものも買えない。見たい映画を上映している映画館もない。女の子と遊ぶこともできない。等々。

　だが、ここに書かれていることを、虚偽としてではなく、そのまま文字通りうけとった場合には、このジョークは、むしろ、現在のわれわれの状況の記述になるだろう。確かに、われわれは自由だと言わざるをえない。商品はたくさんあって、何を買ってもよい。いくらでも映画を見ることもできる。恋愛や交際も自由だ。しかし、ただ一つ欠けていることがある。われわれの「不自由」を分節する言語（［C］いインク）がないのだ。「自由か不自由か」と問われれば、十分な自由があると言うほかなく、われわれがいかに自由かを［D］いインクで書くしかない。しかし、にもかかわらず、われわれは、どこか根本的な部分で不自由だ。その不自由を［オ］する方法を、つまり「［E］いインク」をわれわれは持っていない。

　あるいは、われわれの状況を、精神分析をはじめとする何らかの「治療」を受けにきた精神疾患の患者に喩（たと）えてみることができる。普通の病気の場合には、症状は問題（の一部）であり、患者は、医者に、それへの解決を求めている。しかし、精神疾患や神経症の場合には、問題と解決の関係が、

これとは逆になっていることに気づく。これらの場合には、症状はすでに、何らかの問題に対する応答（回答）である。患者は、何かの問題に応答しようとして、症状を形成しているのだ。しかし、それは、何に対する応答なのか、何が問題なのか、それがわからないのだ。普通の病気の場合には、問題が症状として与えられ、医者は、この問題への回答を探す。しかし、精神疾患では、回答はわかっているのだが、それが、どんな問題への回答かわからないのだ。専門家に委ねられるのは問題を探すことだ。

　現在のわれわれの状況は、この精神疾患のケースに喩えられる。どこか空虚な自由、奇妙な[5]ヘイソク感をともなう過剰な自由は、何かへの応答であり、「症状」のようなものである。しかし、それは何への応答なのか。何が問題なのか。それがわからない。

（大澤真幸『自由という牢獄』による）

（注）メルクマール＝目印、標識を意味するドイツ語。
ミシェル・フーコー（一九二六～一九八四）＝フランスの哲学者。
アイザイア・バーリン（一九〇九～一九九七）＝イギリスの哲学者。
モーセの十戒＝『旧約聖書』においてモーセが神から与えられた十の戒律。

スラヴォイ・ジジェク（一九四九～　）＝スロベニアの哲学者、精神分析家。

ミヒャエル・エンデ（一九二九～一九九五）＝ドイツの児童文学者。

問一　傍線部1～5の片仮名を漢字に直して、記しなさい。

問二　空欄ア～オに入るもっとも適切な語を、次のa～rの中からそれぞれ一つ選んで、記しなさい。ただし、一つの語は一箇所にしか入りません。

a　義務　b　権利　c　逆説　d　結末　e　規範　f　解決
g　表現　h　直訴　i　使命　j　解放　k　検閲　l　仮説
m　改善　n　没収　o　啓示　p　満足　q　回覧　r　聴取

問三　傍線部Xで筆者は「これほどまでに、われわれの社会は許容的である」と述べていますが、それは「われわれの社会」がどのようになっていることをさしていますか。その説明としてもっとも適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで、記しなさい。

1　人権思想と民主主義が世界を席巻していること
2　第一の自由が第二の自由の最後の障壁を崩すまでになっていること
3　啓蒙主義の時代の知識人が理想とした二種類の自由を完全に享受できていること
4　グローバル化が進み、人々の権利意識が多様化して、何でも許されるようになっていること
5　無神論者が多数派となり、神の戒律はもはや守るべきものとは見なされなくなっていること

問四　傍線部Yに「あれほど脱出することを渇望していた彼が、やがて何も欲しなくなった」とありますが、「何も欲しなくなった」のはなぜですか。その説明としてもっとも適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで、記しなさい。

1　気が多すぎて、かえって混乱してしまったから
2　期待が大きすぎて、がっかりしてしまったから
3　許容範囲が広すぎて、やる気を失ってしまったから
4　恐怖にとらわれすぎて、前に進めなくなってしまったから
5　決断力がなさすぎて、きっかけをつかめなくなってしまったから

問五　空欄A～Eには、赤か青、いずれかの漢字が入ります。その組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで、記しなさい。

1　赤―青―青―青―赤
2　青―赤―赤―青―青
3　青―赤―青―赤―青
4　青―赤―赤―青―赤
5　赤―青―赤―青―赤

問六　傍線部Zに「自由が不自由へと反転するのは、どのような機制によるのか」とありますが、「反転」をひき起こす「機制」とはどのようなものですか。次の文章はそれを説明したものです。空欄Ⅰ・Ⅱに、本文の表現を用い、指定の字数内でもっとも適切な語句で記述して、文章を完成させなさい（字数は句読点、記号、符号を含みます）。

いかなる禁止をも乗り越えて［　Ⅰ　］（十字以内）ことは、あらゆることが許されるからこそ選択が困難になる世界へと人を導いてしまう。つまり、すべてが許容されることで［　Ⅱ　］（十字以内）世界が出現するという機制が働いていることになる。

（次ページより解答欄）

問一

1	4
2	5
3	

問二

ア
イ
ウ
エ
オ

問三

問四

問五

問六

Ⅰ

Ⅱ

第四講　「様々な設問」を解く　解答

問一

1	2	3	4	5
偶像	賢明	誘惑	覆〔蔽〕	閉塞

問二

ア	イ	ウ	エ	オ
e	o	c	k	g

問三　2

問四　3

問五　4

問六

Ⅰ　人権が許容される

〔人権が保障される〕

Ⅱ　自由が不自由になる

〔自由が束縛になる／解放が束縛である〕